よう。』

と嘘太郎が言ひますと爺さんも大さう喜んで、

『ぢやこれから直ぐ行つて來てお呉れ、お前がお月樣の世界の樣子や、お星樣の世界の樣子を歸つて來て天文學者の先生達に委しくお話したなら、何れ位先生達が喜ぶか知れやしない、さうすれば日本の大名譽ばかりぢやなくて、この地球の名譽にもなる事だから行けるだけ行つて百萬年過つたら歸つて來るんだよ。』

『あー百萬年過ちやァ歸つて來るさ、本統に面白さうだなァ、ぢや爺さん行つて來るよ。』

と嘘太郎は千里舟を抱いて、千里車に右足をかけまして爺さんに敎はつた通りに。

「正月二日の初夢に夢は見もせで千里舟、千里車に打ち乘りて、大日本帝國の大名譽を來たすべく

今度月界星界お旅行博士の嘘太郎。エンヤラヤンのヤン。」と拍手をしながら出だして行きましたのが丁度今年から百萬年の昔に當ります。なんでもこのお正月の三日の日には、嘘太郎は白髪の爺さんとなつてお月樣やお星樣の旅行から日本の國の何處かへ歸つて來て居るでせう。めでたし〳〵

笑ひ草

不思儀な勘定

二人連れで新橋の停車場へ着くと、車夫が

車『旦那、二人乘りで淺草までお供致しませう』?

二人『淺草まで何里あるかなー』?

車『へー　彼れ是れ一里もありませう』

二人『じやー　譯きやねー　歩いて行くべー　二人

で歩きや半里ヅヽだ。』!!!

燒いて食つた

お正月が來たのに　お酒も飲めないから、せめて　酒の糟でも食べて顏を紅くして行かうと言ふので、或貧乏人が酒の糟に醉うて出かけた所が途中で一人の友達に出遭つた

友『やー　正月だつてんで　お屠蘇の色がいーじやないか。』?

貧『インニャ お酒の糟を食べたのだ』

家へ歸つて來て　女房に話すと　女房は　そんな時にはお酒を飲んで來たといふものだと敎へた。二日目に又糟を食つて出かけると　又友達に遭つた

友『やー　又糟を食て來たか』

貧『インニャ　御酒を呑んで來た』

友『そーか　何杯飲んだ』?

貧『たつた三片だ』

貧『ハヽヽヽ　じやー矢つ張り糟だろー』

家へ歸つて　笑はれた事を話すと　女房は御酒を飲んだと言ふた時は　幾片では可けぬ　何合とか何杯とか言ふものだと敎へた。其翌くる日又糟を食つて出かけて　又友達に遭つた。

友『又　糟食つたのかね』

貧『インニャ　お酒だ』

友『何合飲んだ』

貧『二合』

友『冷やで飲んだか、燗してか』

貧『インニャ　燒いてだ』

骨牌に勝つ法二つ

骨牌に勝つ方法を二つ敎へようと言ふから

如何するのかと聞くと『一つは少しも知らぬ人とするのと　今一つは自分より定つて下手な人とするのだ』といふことでした。

不老不死の藥

翁丸

太『お父さん、あの何卒今夜は、膀の外れる樣な御話して頂戴』!!

父『此處へお出で、膀の外れる樣な話だ?。それぢや序に首の外れる樣な話をすると爲う。氣を付けて首を落すな!

扨支那で昔、漢と云つた時に、武帝と云ふ豪い天子樣が有つて、學問も出來、戰も强く、周圍の國々を降參させて仕舞つて、國は大きくなり、金

銀は澤山貯て、天下中に思ふ樣に成らない事は無くなつたが、唯一つ思ふ樣に行かない事があつた』

父『太郎何だか宛てゝ見』?

太『空飛ぶ事でなくつて』?

父『否』

太『天に登る事』?

父『中々、然うでない。仙人の處から、不老不死の藥と稱つて、幾年經つても老人にならず、何んな事でも死なぬといふ御藥を貰ひたいと思たが、中々思ふ樣に貰へない。夫で毎日〳〵心配して居られた。處が到頭蓬萊山といふ處の仙人から其の藥を皇帝に差上げた』

太『日本には無くつて』?

父『さあ大喜び、皇帝は此の藥があれば最早占めた、何時まで も朕は死なずに、若くつてぴん〳〵